

YNU 書き言葉コーパスに見られる日本語学習者の接続詞の選択  
- 韓国語母語話者の「それで」の多用に注目して -

Conjunction selection by Japanese Language Learners found in YNU Written Language  
Corpus

- Focusing on Use of “SOREDE” by Korean Learners of Japanese -

金蘭美

キーワード：YNU 書き言葉コーパス, 接続詞, それで, 順接, 韓国人学習者

外国語キーワード：YNU Written Language Corpus, Conjunctions, SOREDE, JUNSETSU,  
Japanese language learners

要旨

日本語学習者の接続詞の使用傾向を調べるため、金澤編（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』（通称 YNU 書き言葉コーパス）に収録されている 1080 編の作文を対象に形態素解析を行い使用されている接続詞を抽出した。それらの接続詞を類型別に比較した結果、日本語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者の接続詞の使用傾向に違いがあることが明らかになった。本稿ではその中で、「順接」の接続詞に注目し、検討を行った。その結果、三者の間で接続詞全体における「順接」の使用率にはあまり差が見られなかったが、韓国語母語話者には「それで」の使用が目立っており、一方日本語母語話者には「そこで」の使用が多く見られた。そこで、タスク別に使用状況を調べた結果、韓国語母語話者の場合は、物語を紹介するタスクにおいて因果関係を表す際に「それで」を多用していたが、日本語母語話者は「そこで」や「すると」を使用していることがわかった。

英文要旨

In this study, a research of the YNU Written Language Corpus was conducted in order to clarify how native Japanese and Japanese learners use conjunctions, and find out whether there are any differences between how JUNSETSU conjunctions are used in Korean, Chinese, and Japanese. There were differences between the three groups in how they used different categories of conjunctions. This paper is focused on the use of JUNSETSU conjunctions. There were no significant differences in the frequency of JUNSETSU conjunction usage. However, Korean Japanese learners frequently used “SOREDE”, Chinese Japanese learners used “DAKARA”, and Japanese natives used “SOKODE” and “SURUTO” when explaining cause and effect relationships in the folklore task.

## 1. はじめに

日本語学習者の接続詞の使用については、日本語母語話者との比較から接続詞の多用が指摘されてきた（浅井 2003, 田代 2005 など）。接続詞の多用は、時には単調な印象を与えてしまうことがあり、文章の流れを妨げ、わかりにくいものにしてしまうこともある。このような日本語学習者の接続詞の使用についてその全容を明らかにすることは容易なことではないが、接続詞の使用は文章のジャンルによってある程度決まっており（石黒他 2009）、日本語学習者についても様々なジャンルの文章を対象に調べることで、ある程度の傾向が把握できるのではないかとと思われる。今までの学習者の接続詞の使用に関する研究では、主に意見文を対象にしているが、これらは意見文における接続詞の使用状況であるため他のジャンルの作文でも同様の傾向が見られるとは限らない。また、接続詞の使用における母語の影響についてもまだ十分な検討は行われていない。そこで本研究では、12 種類の様々な作文が収録されている金澤編（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』（以下「YNU 書き言葉コーパス」<sup>1</sup>）を対象に日本語学習者の接続詞の使用状況を把握し、学習者の母語および文章のジャンルという観点から接続詞の使用にどのような特徴があるのか検討を行うことにする。

## 2. 先行研究の問題点と本研究の目的

### 2-1. 日本語学的観点からの研究

接続詞における日本語学の観点からの研究は、接続詞の機能に注目し、接続詞を類型別に分類を試みている研究や個別の接続詞の意味機能に関する研究が主流である。接続詞の類型に関する研究としては、市川（1978）、佐久間（1983）などが挙げられる。市川（1978）では、文と文の論理的な関係そのものを「文の接続関係」と呼び、表 1 の 8 つの型を基本的な類型として挙げている。表 1 は、市川（1978）で挙げている接続詞の類型とその機能および該当する接続詞を表形式でまとめたものである。

表 1 市川（1978）における「文の接続関係の基本的類型」（市川 1978：89-93）

類型	接続詞の例
順接型	前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型
	だから・ですから・それで・したがって・そこで・そのため・そういうわけで・それなら・とすると・してみれば・では・すると・と・そうしたら・かくて・こうして・その結果・それには・そのためには

<sup>1</sup> 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』は通称「YNU 書き言葉コーパス」と言われており、YNU とは横浜国立大学、Yokohama National University の略である。

逆接型	前文の内容に反する内容を後文に述べる型
	しかし・けれども・だが・でも・が・といっても・だとしても・それなのに・しかるに・そのくせ・それにもかかわらず・ところが・それが
添加型	前文の内容に付け加える内容を後文に述べる型
	そして・そうして・ついで・つぎに・それから・そのうえ・それに・さらに・しかも・また・と同時に・そのとき・そこへ・次の瞬間
対比型	前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型
	というより・むしろ・まして・いわんや・一方・他方・それに対し・逆に・かえって・そのかわり・それとも・あるいは・または
転換型	前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型
	ところで・ときに・はなしかわって・やがて・そのうちに・さて・そもそも・いったい・それでは・では・ともあれ・それはそれとして
同列型	前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型
	すなわち・つまり・要するに・換言すれば・言い換えれば・たとえば・現に・とりわけ・わけても・せめて・少なくとも
補足型	前文の内容を補足する内容を後文に述べる型
	なぜなら、なんとすれば・というのは・ただし・もともと・ただ・なお・ちなみに
連鎖型	前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型（接続語句は普通用いられない）

また、佐久間（1983）では、市川（1978）をはじめとするそれまでの文の接続関係の類型を扱っている一連の研究を取り上げ、それぞれの類型における異同を検討している。佐久間（1983：40-42）では、今までの文の接続類型の考察は「接続詞の意義・用法の分類を基礎としたものが多かったため、結果的には共通点の多い類型が立てられたが、その詳細を検討すると、かなりの異同がある。従って、類型目の数が一致しない結果となっている。（中略）各人の日本語の論理のとらえ方や接続詞の認定基準・意識・用法についての考え方は相当異なることが予想できる」と述べられている。

さらに、西（1995）では、新聞社説における接続表現の出現状況を調べ、「諸説中最も多く使われている接続類型の名称が、「累加型」以外はすべて市川案と一致していることがわかる」とし、市川案を基本としながら独自の異種類型の複合型を加えた8種の接続類型を用いて分析を行っている。

## 2-2. 日本語教育学的観点からの研究

日本語教育学的観点からの研究としては、日本語学習者の接続詞の使用状況を調査した浅井（2003）、倉持・鈴木（2007）などが挙げられる。

浅井（2003）では、日本語母語話者30名、上級日本語学習者（中国母語話者）32名に「ゴミ問題の現状と解決法」をテーマとした800字程度の作文を書いてもらい、それらにおける接続詞の使用状況を比較・分析している。その結果、学習者の方が接続詞の使用数・

種類ともに多く、これは母語話者では接続詞を使わない場合でも学習者は接続詞を使うためであると指摘している。また、接続詞の種類を比較した結果、母語話者は、添加>逆接>同列の順で使用例が多かったのに対し、学習者は添加>逆接>順接の順であったとし、母語話者の「同列」と学習者の「順接」の違いに関しては、学習者は論理関係をはっきりしようとする傾向があるためであると指摘している。

一方、倉持・鈴木（2007）では、留学生の接続詞の使用状況の調査を実施し、①学習者は接続詞をよく耳にし、目にしている割に正確に使えない。②接続詞習熟には日本滞在年数は関係なく、機関・教材・教え方などの学習方法の工夫が必要である。③接続詞は自然習得しやすいもの（「だって」など）も一部あるが、しにくいものが多い。④これまで初級のものとしてきた「そして」「それから」、2級基準の「すると」に誤用が多い、ことを報告している。

このほかに、日本語学習者の接続詞の誤用を扱っているものとして市川（1998）が挙げられる。機能別に見た接続詞の誤用分析を行い、順接の接続詞では「だから」「それで」「そこで」「すると」の4つの接続詞における混同項目が多岐にわたっていることから学習者にはこれら4つの接続詞の使い分けが簡単ではないことを指摘している。

### 2-3. 各種コーパスを対象とした研究

書き言葉コーパスを対象としている研究としては、様々なジャンルのコーパスを用いて接続表現の使用実態を調査した石黒他（2009）が挙げられる。石黒他（2009）では、新聞の社説、新聞のコラム、学術論文、エッセイ、小説、シナリオという異なるジャンルのコーパスを対象に、①総文数に対して何%ぐらい接続表現が用いられているか、②個々の接続表現の形式がそれぞれいくつ使われているかを調べている。その結果、総文数に対する接続表現の頻度が最も多かったジャンルは講義（36.9%）であり、続いて論文（25.5%）、エッセイ（13.2%）、社説（12.2%）、小説（10.4%）、シナリオ（3.0%）の順であった。この結果から、石黒他（2009）は、ジャンルによる接続表現の多寡が明確であり、論理性が重視される学術的な内容の文章・談話が接続表現と相性がよい様子がうかがえるとしている。

また、金（2014）では、「YNU 書き言葉コーパス」に収められている12種類のタスク1080編の作文における接続詞の使用実態を明らかにしたうえで、日本語学習者の「そして」の多用に注目し分析を行っている。特に、同コーパスの評価基準による作文評価で、下位群として分類されたグループでは「そして」の使用が目立つが、日本語レベルが上がるにつれて「また」の使用が多くなっていると述べ、その原因は「そして」と「それから」などとの混同による誤用が減り、さらに段落や複段落で書く能力がついてきたことであると指摘している。また、金（2017）では、同様のコーパスを用いて、接続詞を類型別に分類し、韓国語母語話者に「逆接」の接続詞が多いことを報告し、その原因が意見の述べ方や

説明の仕方において中国語母語話者や日本語母語話者と異なっていることを挙げている。

最後に、呉（2015）では、接続詞教育の見直しのため、実際に学習者の中で接続詞がどのように使われているかを分析する必要があるとしたうえで、書き言葉（「日本語学習者作文コーパス」、少納言—KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」）と話し言葉（「タグ付き KY コーパス」）の両方を対象に日本語母語話者と学習者の使用実態について比較・分析を行っている。さらに、その分析結果と日本語教科書における出現頻度を比較し、接続詞が現在学習者にどのように教えられているかを考察している。その結果、「現在日本語教育のなかで接続詞は学習者のニーズに十分に応えられていない」とし、日本人と学習者の使用頻度、誤用の多いもの、学習者のレベルなどさまざまな要素を考慮し教え方を工夫する必要があると提案している（p.15）。

#### 2-4. 個別接続詞の意味用法に関する研究

本稿では「それで」を中心に記述することから、「それで」に関する研究を取り上げることにするが、主に「そこで」との使い分けを扱っている研究に絞って見ていくことにする。

まず、田中（1984）では、「それで」「そこで」「だから」の意味機能を比較し、その中で「それで」については「承前の接続」とし、必然的な関係を示す、必然的な事象の接続をずるとしている。また「そこで」については「転換の接続」とし、まったく別の話を切り出したり、新たな話題をもちだすときに使うとしている。「そこで」については、森田（1989）でも「前の事柄を一段落つけてから、新たにそこから引き起こされた事態を提起する」ものであり、「強い因果関係は必ずしも必要ない」と述べられており、「新たにそこから引き起こされた事態を提起する」という後件の働きは後述する萩原（2006）のいう「前件で生じた状況／場面の改善／解決するための行為」に類似している。

また、比毛（1989）では、「それで」については「あらゆる現象の「原因—結果」の関係を客観的に関係づける」と述べられており、「そこで」については「ある主体をとりまく客観的な状況についてかたる文と、そうした状況における主体の積極的で意図的な行動についてかたる文との論理的な関係付け」としている。

さらに、萩原（2006）では、それまでの先行研究を踏まえ「それで」「そこで」「だから」の使い分けについて言及している。萩原（2006）は「それで」と「そこで」の共通する特徴は「基本的に前件と後件の関係は「原因—理由」の関係にある。」ことであり、違いは「「それで」は前件で生じた原因により、その結果後件である行為をしたという意味を表し、「そこで」は、前件の状況／場面により、後件ではその前件で生じた状況／場면을改善／解決するための行為をしたという意味を表す」としている。

## 2-5. 本研究の目的

本研究では先行研究から明らかになった①文章のジャンルによって使用される接続表現が異なっていること（石黒他 2009, 金 2014), ②テーマ・分量・ジャンルなど条件が同一の場合学習者の方に接続詞が多いこと（浅井 2003, 金 2014, 田代 2005,)を踏まえ, 学習者の母語によって接続詞の使用に特徴があるかどうかを明らかにすることを目的とする。浅井（2003）では中国語母語話者を対象としており, 田代（2005）では, 中国語母語話者および韓国語母語話者を対象としているが, 学習者の母語がどのように接続詞の使用に影響しているかまでは言及されていない。学習者の母語によって接続詞の使用傾向が異なっているとすれば, その特徴を把握することは非常に重要であると考えられる。しかしながら管見の限りでは接続詞の使用において学習者の母語を考慮している研究は見当たらない。文法項目や語彙の選択に現れるような母語の影響というものがもし接続詞にもあるとすれば, 母語を考慮した指導も考えていく必要があるのではないだろうか。

また, 従来の研究では分析の資料として主に意見文を対象にしているが, 上述したように文章のジャンルによって使われる接続詞はある程度決まっていることから, 意見文に限らず様々なジャンルの文章を対象に比較・分析を行う必要があると考えられる。

そこで, 本稿では, 調査資料として, 「YNU 書き言葉コーパス」に収められている日本語学習者と日本語母語話者の書き言葉データを用いることにする。「YNU 書き言葉コーパス」では, 日本語母語話者 30 名, 韓国語母語話者 30 名, 中国語母語話者 30 名に対し 12 種類の同一のタスクが課されている。そのため, さまざまなジャンルに出現する接続詞を観察することができ, 母語の異なる学習者同士の比較が可能であると考えられる。

## 3. 調査

### 3-1. 使用コーパスの概要

本稿で使用したコーパスは「YNU 書き言葉コーパス」に収録されている, 12 種類のタスク×90 名分(韓国語・中国語・日本語母語話者各 30 名)=1080 編である。次の表 2 に「YNU 書き言葉コーパス」のタスクの詳細を示しておく。

表 2 YNU 書き言葉コーパスの 12 のタスク（金・金庭 2016 から抜粋）

「自発型」のタスク	読み手・親疎関係	「頼まれ型」のタスク	読み手・親疎関係
長さ A (短) 《1》メールで面識のない先生に本を借りる 《2》メールで友人に本を借りる 《3》レポートでグラフを説明する	特定・疎  特定・親 不特定	長さ A (短) 《7》メールで先生に観光スポット・名物を紹介する 《8》メールで先輩に起こった出来事を友人に教える 《9》広報誌で国の料理を紹介する	特定・疎  特定・親 不特定

長さB (長) 《4》メールで学長に奨学金増額の必要性を訴える 《5》手紙で入院中の後輩を励ます 《6》新聞の投書で市民病院の閉鎖について意見を述べる	特定・疎  特定・親  不特定	長さB (長) 《10》メールで先生に早期英語教育の意見を述べる 《11》メールで友人に早期英語教育の意見を述べる 《12》小学生新聞で七夕の物語を紹介する	特定・疎  特定・親  不特定
--	-----------------------------	---	-----------------------------

調査参加者のうち、日本語母語話者は横浜国立大学在学中の学部生であり、非日本語母語話者の場合は同大学在学中の留学生で（大学生，大学院生，研究生），日本語力は大学の講義が受けられることから一般的には上級と称されるレベルであると考えられる<sup>2</sup>。又、「YNU 書き言葉コーパス」は読み手，伝達媒体，長さなどが考慮されて作られており，一人の被調査者に12種類のタスクを課しているという特徴がある。

### 3-2. 分析の枠組み

本稿では，接続詞の類型においては市川（1978）に従って分類を行う。西（1995）でも述べられている通り，これまでの接続詞のタイプの分け方には諸説あるものの，「累加型」<sup>3</sup>という名称が最も多く使われているということ以外はほとんどが市川（1978）の案と一致しているためである。また，「接続詞」として取り上げ分析する対象としては形態素解析器「茶筌（ChaShen）」の解析結果に従うことにする。本稿では接続詞として抽出されたものを比較するため，市川（1978）の「⑧連鎖型」は取り扱わないことにする。

### 3-3. 調査結果

#### 3-3-1 接続詞の類型別使用数

まず，「YNU 書き言葉コーパス」の全ての作文を対象に形態素解析を行い，使用されている接続詞を抽出した。その後，抽出された接続詞を市川（1978）に従い，類型別に分類し，母語別に比較を行った。その結果を，表3に示しておく。

表3 接続詞の類型別使用数の比較

類型	韓=687	中=733	日=538
順接	146 (21.3%)	172 (23.5%)	111 (20.6%)
逆接	200 (29.1%)	142 (19.4%)	138 (25.7%)

<sup>2</sup> 「YNU 日本語書き言葉コーパス」の調査参加者に関するより詳しい情報については金澤編（2014）の「第1部 資料編」を参照されたい。

<sup>3</sup> 「累加型」とは，市川（1978）の分類では「添加型」（前文の内容に付け加える内容を後文に述べる型）に当たるものである。しかし，研究者によっては接続詞の分類の仕方が異なっており，市川（1978）の「添加型」の下位分類のうち「継起」や「並列」は含まれない場合もある。

添加	157 (22.9%)	231 (31.5%)	180 (33.5%)
対比	9 (1.3%)	17 (2.3%)	9 (1.7%)
転換	115 (16.7%)	75 (10.2%)	40 (7.4%)
補足	46 (6.7%)	76 (10.4%)	55 (10.2%)
同列	14 (2.0%)	20 (2.7%)	5 (0.9%)

表3における中・韓・日はそれぞれ中国語母語話者、韓国語母語話者、日本語母語話者のことを指しており、「=」の数字は各母語話者別の接続詞の合計を表している。また、( )の数字は接続詞の合計に対する類型別接続詞の割合を示している。

表3から、まず、中国語母語話者>韓国語母語話者>日本語母語話者の順で接続詞の使用が多く、日本語母語話者より非日本語母語話者の方が接続詞を多用しているという結果になった。これは浅井(2003)や田代(2005)の結果とも一致するものである<sup>4</sup>。次に、類型別の使用数を比較すると、韓国語母語話者の場合、中国語母語話者と最も差が大きい接続詞の類型は「逆接」と「添加」であることがわかる。韓国語母語話者は「逆接」の接続詞の使用が最も多く、中国語母語話者は「添加」の接続詞の使用が最も多い。また、韓国語母語話者の場合、日本語母語話者との差が最も大きい接続詞の類型は「添加」である。さらに、類型別使用数上位3位を母語別に比較してみると、韓国語母語話者は、「逆接」>「添加」>「順接」の順で使用数が多く、中国語母語話者は「添加」>「順接」>「逆接」の順であった。一方、日本語母語話者の場合は、使用数の多い順から「添加」>「逆接」>「順接」であり、類型別の使用数では三者ともに上位3位までの傾向が異なっていることがわかる。これらの結果から、接続詞の使用には母語による違いがあると考えられる。特に、「YNU 書き言葉コーパス」では、すべての調査参加者に対して同一の数と種類のタスクを課していることを考慮すると、母語によって好まれる接続詞の種類は存在するといえそうである。このような結果を踏まえ、本稿ではひとまず「順接」の接続詞に焦点を当てることにする<sup>5</sup>。「順接」は、市川(1998)によると「前文の内容を条件とするその内容を後文に述べる型」のことで「順当」「きっかけ」「結果」「目的」にまた下位分類される。今回の調査から「順接」の接続詞の場合、三者の間で使用率の差があまり見られなかったが、実際にどのような接続詞が使用されているのか、母語による違いが見られるのかどうか、その詳細についてみていくことにする。

<sup>4</sup> 1万字あたりの使用数を基準として比較してみた結果、日本語母語話者は44.5回(文字数120,805字)、日本語学習者は54.0回(文字数257,376字)と、日本語学習者のほうが10回ぐらい多いことがわかった。このような結果が得られたのは、日本語母語話者の場合は、複文・段落や復段落を駆使して、文を長く書くことができるが、日本語学習者の場合はまだそのような能力が不十分であるためであると考えられる。

<sup>5</sup> 韓国語母語話者に最も多く使用されていた「逆接」の接続詞の詳細については金(2017)を参照されたい。



### 3-3-2 「順接」の接続詞の種類と使用数

「順接」の接続詞を対象に三者の使用数を比較した結果、次の表4のようになった。網掛けになっている部分は各母語話者に最も多く見られたものである。

表4 「順接」の接続詞の使用数の比較（50音順）

接続詞	韓国=146	中国=172	日本=111
こうして	1 (0.7%)	3 (1.7%)	5 (4.5%)
したがって	5 (3.4%)	16 (9.3%)	4 (3.6%)
すると	0 (0.0%)	4 (2.3%)	16 (14.4%)
そうしたら	1 (0.7%)	3 (1.7%)	0 (0.0%)
そうして	1 (0.7%)	0 (0.0%)	1 (0.9%)
そうすると	3 (2.1%)	9 (5.2%)	1 (0.9%)
そうなると	3 (2.1%)	0 (0.0%)	1 (0.9%)
そこで	11 (7.5%)	19 (11.0%)	32 (28.8%)
そしたら	4 (2.7%)	2 (1.2%)	1 (0.9%)
それで	74 (50.7%) <sup>6</sup>	35 (20.3%)	8 (7.2%)
だから	26 (17.8%)	54 (31.4%)	22 (19.8%)
で	9 (6.2%)	8 (4.7%)	14 (12.6%)
ですから	1 (0.7%)	16 (9.3%)	2 (1.8%)
(それ) なので	5 (3.4%)	3 (1.7%)	0 (0.0%)
よって	2 (1.4%)	0 (0.0%)	4 (3.6%)

表4を見ると、韓国語母語話者の場合は「それで」の使用が最も多く、それに対して中国語母語話者の場合は「だから」、日本語母語話者の場合は「そこで」の使用が最も多いことがわかる。韓国語母語話者の「それで」の使用率は、「順接」の接続詞の半分を占めており、中国語母語話者や日本語母語話者に比べ多用していると考えられる。また、中国語母語話者の「だから」の場合、その敬体の「ですから」と合わせると、「順接」の接続詞全体のほぼ4割近くを占めている。これは韓国語母語話者や日本語母語話者のほぼ2倍に当た

<sup>6</sup> K020 が 74 例中 10 例を使用していたので個人差も考えられるが、「それで」の多用は「YNU 書き言葉コーパス」に限られた現象ではない。それを検証するため、国立国語研究所が作成した『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース』を調べてみた結果、韓国語母語話者の「それで」の使用率は日本語母語話者の 13 倍、中国語母語話者の 2 倍であった。

るものである。一方、日本語母語話者の「そこで」の使用率は、中国母語話者に比べると2.5倍、韓国語母語話者に比べると約4倍に上っている。さらに、日本語母語話者の特徴として「すると」の使用が多いことが挙げられるが、中国語母語話者の場合には2.2%、韓国語母語話者に至ってはまったく使われていない。

以上から、「順接」の接続詞において全体の使用率は三者の間にそれほど差が見られないものの、個別の接続詞を観察してみると、各母語話者別に使用頻度に差があることがわかった。次節では、どのような場合にこれらの接続詞が用いられているのかを明らかにするため、タスク別の使用状況を確認していく。

#### 4. 考察

本節では、3節の一連の調査から、韓国語母語話者による「それで」の使用が中国語母語話者や日本語母語話者より多かった原因を探っていくことにする。

##### 4-1. 「そこで」の非用による「それで」の多用

まず、三者における「それで」の使用場面を調べるため、タスク別の使用数を確認してみた。その結果を表5に示しておく。

表5 「それで」のタスク別使用数

それで	韓国=74	中国=35	日本=8
タスク 1	5	1	0
タスク 2	4	0	2
タスク 3	1	0	0
タスク 4	2	2	0
タスク 5	9	5	2
タスク 6	5	0	0
タスク 7	1	1	0
タスク 8	12	8	4
タスク 9	2	3	0
タスク 10	2	0	0
タスク 11	4	2	0
タスク 12	27	13	0

表5を見ると、韓国語母語話者の場合、12タスクのすべてにおいて「それで」の使用が見られており、特にタスク12での使用が顕著であることから、タスク12において韓国語母語話者がどのような場面で「それで」を使用しているのかを調べた。タスク12は「七夕」

の物語を紹介するものであり、表6の①～⑨は「それで」が使用されていた場面を抽出して、物語の展開順に並べたものである。また、各場面の「:」の左側は「それで」の前件であり、右側は後件である。なお、前件が同じで後件のみ異なる場合はa, bに分けて記してある。

表6 タスク12の韓国語母語話者の「それで」の使用場面

前件：後件	数
① 織姫はとても真面目ではたを織るのが上手だった：織姫は布を織る仕事ばかりしていた	2
② 自分のことは顧みなかった：神様は織姫のため相手を見つけてくれた／織姫の相手を見つけ結婚させた	7
③ 恋に落ちた：二人は自分たちの仕事を忘れ毎日遊んでばかりいた	3
④ 二人は仕事を忘れ遊んでばかりいた：天の国人たちは困ってしまった	2
⑤ 二人は仕事を忘れ遊んでばかりいた：怒った神様は二人を別れさせた	3
⑥ 別れさせられた二人は悲しんでばかりいた：神様は年に一回二人を会わせてあげることにした	2
⑦ 神様が年に一回会わせてくれる：二人は再会を楽しみに仕事を頑張った	1
⑧-a 洪水で天の川を渡れない：カラスたちが橋を作ってくれた	2
⑧-b 洪水で天の川を渡れない：二人はまた悲しんでいた	1
⑨-a カラスたちが橋を作ってくれた：カラスたちのおかげで二人は会うことができた	3
⑨-b カラスたちが橋を作ってくれた：それが橋の名前の由来になった	1

表6を見ると、韓国語母語話者は「②自分のことは顧みなかった：神様は織姫のため相手を見つけてくれた／織姫の相手を見つけ結婚させた」や「③恋に落ちた：二人は自分たちの仕事を忘れ毎日遊んでばかりいた」という因果関係で結びつける必要のない場面でも「それで」を使用している。

一方、日本語母語話者の場合はタスク12の「それで」の使用は0例であったが(表5参照)、同じ場面で使われている接続詞を調べた結果「そこで」を使用している場合が多いことがわかった。ただし、①～⑨のすべての場面に現れるわけではなく、半分以上の場面(①③④⑦⑨)では使用されていなかった。日本語母語話者による「そこで」の使用は、場面②で8例、場面⑥で5例、場面⑤で4例、場面⑧-aで2例あり<sup>7</sup>、全部で19例あった<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> 日本語母語話者の場合、場面⑧-b「洪水で天の川を渡れない：二人はまた悲しんでいた」は見当たらなかった。

<sup>8</sup> 場面⑥は「そこで」が使われていないものでも、前件の状況を後件で解決するといった関係を表す表現が多数見られた。例えば、「それを見た」、「見るに見かねた」、「困った」、「それではまずいと」、「これではいけないと思った」、「かわいそうに思った」な

これは「そこで」の出現数 32 例の約 6 割にあたるものである。このような日本語母語話者と韓国語母語話者の違いは何が原因であろうか。この点を明らかにするためには、まず「そこで」と「それで」の意味機能を比較してみる必要がある。2-4 節の先行研究で取り上げた「それで」と「そこで」の使い分けに関する研究から、「それで」は因果関係を表し、「そこで」は、前件で生じた状況・場면을改善・解決するための（積極的な）行為を取るといった意味を表すと言える。また、両者の大きな違いとしては「そこで」は必ずしも強い因果関係を必要としないということであろう。

このような「それで」「そこで」の違いを踏まえて場面①～⑨を見ると、場面①③④⑦⑨で「そこで」が使われていないのは納得できる。一方、②⑤⑥⑧-a では、前件で困った状況になり、後件でその状況を改善、解決するための行為が述べられていることから「そこで」の使用は適切であるように思われる。韓国語母語話者における「それで」の使用が多いのは、日本語母語話者なら「そこで」を選ぶ場面で「それで」を選んでいるからではないだろうか。例(1)(2)は韓国語母語話者が「それで」を最も多く使用していた場面②の例である。場面②では、織姫が仕事ばかりしており、自分のことを顧みないという（天の神様にとって）困った状況を解決する行為を取るという意味になるため、例(3)のように「そこで」を使用したほうが適切である。「それで」を使用すると、前件と後件の関係は因果関係には変わらないが、前件の状態からの改善・解決のための行為を取るという意味にはならず、織姫をかわいそうに思い何とかしてあげたいという神様の気持ちは十分に伝わらなくなる。

- (1)天の神は、娘が遊びもしないで、仕事ばかりしていることを見て、かわいそうだと感じました。それで人間世界でまじめに牛の世話をしている男の人を紹介してあげました。(K006)
- (2)織姫<sup>9</sup>はとてもきれいで自分の仕事も熱心でしたが、結婚相手がいなかったんです。それでお父さんの空の神様は、人間の男である彦星を紹介して二人を結婚させようと思います。(K037)
- (3)「おりひめ」の作ったものは、すべて美しく、みんなからとてもよろこばれていました。しかし、「おりひめ」は、自分自身の服や髪、お化粧などは何もしてもなく、仕事ばかりしていました。そこで、天の神さまは、だれか良い人はいないかと探しに行きました。(J003)

---

どがある。

<sup>9</sup> 韓国の「七夕」の物語では織姫は「織女（ジンニョ）」、彦星は「牽牛（キョヌ）」である。韓国語母語話者の場合、書き手によってこれらの表記が統一されていなかったため、本稿では「織姫」と「彦星」に統一して表記している。

このように、韓国語母語話者が「そこで」が適切な場面でも「それで」を使用してしまうのは、「そこで」の意味機能を十分理解していないことが考えられる。しかし、タスク12において「そこで」の使用が2例しか見られなかったことを考えると、これらの場面で使う接続詞として「そこで」自体が選択肢の中になかったことも考えられる。

「そこで」を選択しないもう一つの理由としては韓国語の影響が考えられる。「それで」に当たる韓国語の接続詞には「geu-rae-seo」がある。「geu-rae-seo」は韓国語の接続詞の分類では順接で前文が後文の原因・理由を表す接続詞の一つであるとされているが(安 2008), その意味範囲は広く、日本語の「それで」「だから」「そこで」をカバーしているものである。韓国語に「geu-rae-seo」以外に「そこで」に当たる接続詞がないこと、さらに韓国語の「geu-rae-seo」の意味領域の広さが影響したことから、韓国語母語話者はなじみのない「そこで」を選択するより「それで」を選択しやすくなっていたのではないかと思われる。

#### 4-2. 前件と後件の捉え方の違いによる「それで」の多用

次に、日本語母語話者による「そこで」の使用が0例であった場面から、韓国語母語話者の「それで」の多用の原因を考えていきたい。場面①③④⑦⑨では日本語母語話者の「そこで」の使用は0例であった。さらに「それで」のような因果関係を表す接続詞の表現は見当たらなかった。まず、場面①は「織姫はとても真面目ではたを織るのが上手だった：織姫は布を織る仕事ばかりしていた」というものであるが、場面①の前件と後件の関係は原因と結果というよりは「逆接」の関係にあるといったほうが適切であろう。この場面では、日本語母語話者は、例(4)のように主に「しかし」を使用していた。

- (4) 昔、あるところに、「おりひめ」というとても美しい女の人がありました。「おりひめ」は、とてもはたらき者で、毎日のように、はたをおっていました。「おりひめ」の作ったものは、すべて美しく、みんなからとてもよろこばれていました。しかし、「おりひめ」は、自分自身の服や髪、お化粧などは何もしてなく、仕事ばかりしていました。(J003)

また、場面③の「恋に落ちた：二人は自分たちの仕事を忘れ毎日遊んでばかりいた」では、前件と後件を「そして」や「それから(は)」のような時間の経過を表すものや「しかし」・「けれども」・「ですが」のような「逆接」関係を表すもの、さらに「すると」のような「ある事態が起こる結果どうなるか」や「ある行動をした結果どうなるか」などといった因果関係の発見の用法(石黒 2008: 65-66)の接続詞が使用されていた。例(5)と(6)に場面③における日本語母語話者の接続詞の使用例を提示しておく。

- (5) おりひめとひこぼしは、一目会った瞬間に、お互い好きになりました。そして、毎日一緒にいるようになりました。しかし、二人は一緒にいる時間が幸せすぎて、仕事をしなくなりました。(J008)
- (6) お父さんの想像した通り、2人は会った瞬間にお互いを好きになり、毎日会っていました。すると、だんだんとお互い仕事をさぼるようになり、ひこ星の牛はやせていき、おり姫のお父さんなどが着る服もきたなくなっていました。(J020)

韓国語母語話者にも一部「しかし」(7例)や「でも」(1例)を使用している例があったが、それ以外の「逆接」の接続詞や「そして」「それから」「すると」などはこの場面では使用されていない。さらに、日本語母語話者の場合、場面⑦「神様が年に一回会わせてくれる：二人は再会を楽しみに仕事を頑張った」では主に「すると」が使用されている。しかし、韓国語母語話者の場合、「すると」の使用は0例であった。

このようなことから、上記の①～⑨のような場面では韓国語母語話者は文と文をつなげる際に、前件と後件を「それで」を用いて因果関係として捉える傾向があるように思われる。前述のように表6に提示した場面①～⑨は必ずしも因果関係で結びつける必要があるものとはいえない。しかし、韓国語母語話者は因果関係を表す「それで」を使用しており、すくなくとも本稿の場面①～⑨においては、因果関係として捉えている傾向がうかがえる。一方、日本語母語話者は、表6の①～⑨の場面で、時間の経過(「そして」)や逆接(「しかし」、「でも」)、あるいは、事態の発見(「すると」)などの接続詞を使用し、前件と後件の関係についてさまざまな捉え方をしていると考えられる。これは、単に韓国語母語話者に接続詞のバリエーションが乏しいからではないと思われる。実際、日本語母語話者より韓国語母語話者や中国語母語話者の方が使用している接続詞の種類は多いからである(浅井2003, 金2014)<sup>10</sup>。同じ場面で、韓国語母語話者が日本語母語話者の接続詞と異なっているのは、接続詞の前件と後件の捉え方が異なっており、韓国語母語話者がこれらの場面を因果関係として捉え「それで」を選択してしまうものだと考えられる。

#### 4-3. 中国語母語話者との比較から

一方、中国語母語話者の場合は、「それで」の使用35例のうち、タスク12で13例が使用されていた。場面別の使用状況を見ると、場面①③⑧⑨-bでは0例、場面④⑥⑦で1例、場面②で2例、場面⑤と⑨-aでそれぞれ3例ずつであった。また、日本語母語話者や韓国

<sup>10</sup> 浅井(2003:93)の表5の接続詞別使用数を比較した結果を見ると、日本語母語話者は31種類の接続詞を使用しているのに対し、日本語学習者の場合は44種類の接続詞を使用している。金(2014)では「YNU書き言葉コーパス」に接続詞の種類を調べ日本語母語話者が61種類だったのに対し日本語学習者の場合は65種類であったと報告している。

語母語話者にはない場面「(7月7日に会えた) : その日をバレンタインデーとして恋人たちが祝う」で2例が使用されていた。例(7)に場面⑨-aにおける中国語母語話者の例を示しておく。

(7) でも、その日は天国に大雨で、川の水はいっぱいになりました。「どしよう。牛郎と会えなくなっちゃいますよ。」織女は泣きながらそう話した。その時、遠いからたくさん「喜鵲」という鳥が来て、川の上に橋になりました。それで、織女と牛郎はやっと会えました。(C010)

タスク 12 での中国語母語話者の「それで」の使用数は、韓国語母語話者に比べると半分程度である。しかし、「そこで」は9例と韓国語母語話者の2例より多く、「すると」も4例と韓国語母語話者の0例に比べると多く使われている。このようなことから、「そこで」の非用および「すると」など他の接続詞や接続表現をあまり用いないことによる「それで」の多用は韓国語母語話者の特徴であると言えそうである。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、「YNU 書き言葉コーパス」の1080編の作文を対象に日本語母語話者と日本語学習者の接続詞の使用傾向を調べた。その結果、学習者の母語別、あるいは学習者と日本語母語話者の間に使用傾向の違いがあることがわかった。特に、韓国語母語話者の場合、「それで」を多用しており、タスク 12 での使用が目立っていたことから、タスク 12 における「それで」の使用傾向を物語の場面別に調べた。そこから、韓国語母語話者が「それで」を使用している場面で日本語母語話者は「そこで」や「すると」などを使用していることが明らかになった。これらの結果から、韓国語母語話者の「それで」の多用の原因として、日本語母語話者なら「そこで」を使用する場面でも「それで」を選択しており、韓国語母語話者が「それで」を「そこで」までカバーしている韓国語の接続詞「geu-rae-seo」と同様のものとして捉えている可能性に言及した。また、タスク 12 において日本語母語話者は「そこで」や時間の経過（「そして」）や事態の発見（「すると」）などの接続詞を使い、前件と後件の表しているのに対して、韓国語母語話者は前件と後件の関係を因果関係として捉える傾向があることが「それで」の多用につながっていることを述べた。

今回は韓国語母語話者の「順接」の接続詞の使用傾向に焦点を当ててその特徴を探ったが、今後はその他の種類の接続詞についても分析していきたいと思う。また、中国語母語話者に最も多く現われていた「添加」の接続詞の使用および「順接」の「だから」の多用については今後の課題としたい。

## 参考文献

- 浅井美恵子 (2003) 「論說的文章における接続詞について—日本語母語話者と上級日本語学習者の作文較—」『言葉と文化』4 : 87-97 名古屋大学
- 安秉坤 (2008) 『韓日対照文法論』 図書出版宝庫社
- 石黒圭 (2008) 『文章は接続詞で決まる』 光文社出版
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村沙弥子・劉羊 (2009) 「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学センター紀要』12 : 73-85 一橋大学
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 87-122 教育出版
- 市川保子 (1998) 「接続詞と外国人日本語学習者の誤用」『九州大学留学生センター紀要』9 : 1-18 九州大学
- 金澤裕之編 (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』 ひつじ書房
- 金蘭美・金庭久美子 (2016) 「書き言葉における日本語学習者の文体の使用状況 : 『YNU 書き言葉コーパス』を用いて」『ときわの杜論叢』3 : 47-65 横浜国立大学国際戦略推進機構
- 金蘭美 (2014) 「『YNU 書き言葉コーパス』における日本語非母語話者の接続詞の使用—「そして」の多用に注目して—」『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』: 267-286 ひつじ書房
- 金蘭美 (2017) 「YNU 書き言葉コーパスに見られる日本語学習者の接続詞の使用について—韓国語母語話者の「逆接」関係の接続詞に注目して—」『国語研究』35 : 87-93 横浜国立大学国語・日本語学会
- 倉持益子・鈴木秀明 (2007) 「日本語学習者による接続詞の習得—留学生の接続詞使用状況—」『神田外語大学紀要』19 : 211-234 神田外語大学
- 呉囁藝 (2015) 「接続詞教育の見直しの必要性—接続詞の用法と学習者の使用頻度, 誤用から—」『国文目白』54 : 1-16 日本女子大学
- 佐久間まゆみ (1983) 「文の接続—現代文の解釈文法と連文法—」『日本語学』2-9 : 33-44 明治書院
- 佐藤正光 (1992) 「日本語学習者の作文における連文レベルの誤用について」『明治大学教養論叢 日本文学』251 : 173-187 明治大学
- 田代ひとみ (2005) 「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『日本語教育方法研究会誌』12-1 : 24-25 日本語教育方法研究会
- 田中章夫 (1984) 「4 接続詞の諸問題—その成立と機能—」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料 日本文法 第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』81-123 明治書院



- 西由美子（1995）「新聞社説における接続表現の出現傾向」『国文目白』34：85-93 日本女子大学国語国文学会
- 萩原孝恵（2006）「だから」と「それで」と「そこで」の使い分け」『群馬大学留学生センター論集』6：1-11 群馬大学留学生センター
- 比毛博（1989）「接続詞の記述的な研究」言語学研究会編『ことばの科学 2』49-108 むぎ書房
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店